



TITLE:

<学会参加記> 報告者として事務局員としての学会参加

AUTHOR(S):

小山, 大介

CITATION:

小山, 大介. <学会参加記> 報告者として事務局員としての学会参加. 資本と地域 2012, 8: 67-69

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160686>

RIGHT:

<学会参加記>

報告者として事務局員としての学会参加

小山 大介

はじめに

学会報告というのは、自らの準備度合いにも左右されるが、幾度か経験を積むと、当初感じていた緊張も、いくらかは和らいでいく。

東日本大震災ではじまり、欧州金融危機、北朝鮮の金正日総書記の死去で終わった 2011 年は、世界経済はもとより日本経済にとっても特別な年となったのみならず、私個人にとっても特別な年となった。それは、政治経済学・経済史学会（2011 年 10 月 22 日・23 日、立命館大学びわこ・草津キャンパス）、日本地域経済学会（2011 年 11 月 12 日・13 日、金沢大学サテライトプラザ）という 2 つの異なる学会に、報告者として、また学会事務局員として参加し、多くの経験を得ることができたからに他ならない。

ここでは多少紙幅を頂き、この 2 つの学会参加に関する体験談を書きとどめたいと思う。

政治経済学・経済史学会：報告者としての学会参加

大学院生にとって、学会に参加し、なおかつ報告を行うことは、研究と旅費の 2 点について悩むことを意味する。一方で、自らの研究にまだ自信が無い段階での研究報告が、学会で受け入れられるのかということが常に頭を過ぎり、他方で大会会場が遠隔地にあった場合、旅費をどう工面するのかということも考えなければならない。

これまで学会の全国大会に参加し、報告する度に最も安い移動手段を選択するため、新幹線、夜行バス、自家用車を最大限利用してきたが、2011 年度の秋季学術大会は、立命館大学びわこ・くさつキャンパスで行われたため、移動手段と費用捻出に関する心配をする必要はなかった。

ところで、学会報告を行う時、その準備にはおそらく約半年間、少なくとも 3 ヶ月の時間的猶予が必要であると思われるが、政治経済学・経済史学会では、大会約 5 ヶ月前には、自由論題報告にエントリーすることが求められ、少なくともこの時、報告テーマと報告概要を確定しておく必要がある。また 3 ヶ月前までに大会事務局宛に報告要旨を提出することになる。私はこの時、「現代世界経済の多極化と日米多国籍企業の影響力ー「フォーチュン・グローバル 500」及び米国証券取引委員会データ分析から」というテーマで報告することが決まり、その後の変更は基本的に認められない。

私の場合、報告要旨提出までは順調であったがその後、自らの能力の無さから、大会 2 週間前の段階に至っても、

報告レジュメが完成していないという事態となっていた。それからは、岡田先生をはじめ周囲の院生からアドバイスを頂きながら、1 週間で図表とレジュメを完成させ、報告前日に印刷し、何とか大会に間に合わせることが出来た。

報告当日は、自家用車を使い、報告 1 時間前に会場である立命館大学びわこ・くさつキャンパスに到着し、会場入り。プレゼンテーション用に設置されているノートパソコンに報告データを保存、レジュメを準備すると報告 10 分前となった。

政治経済学・経済史学会の場合、自由論題の報告時間は、35 分から 40 分、質疑応答時間が 10 分から 15 分と、他の学会よりも 10 分程度長い。報告については、十分に準備する必要があるが、いざ報告が始まると、一瞬の出来事とも思える速さで時間は経過していく。質疑応答についても、質問を 2・3 件こなすと、10 分経過し、自らの報告はその時点で終了となる。だが報告に際しては、報告するコンテンツを入念に確認し、頭の中で報告順序を整理しておくことが肝要であり、初めて学会報告を行う場合、読み上げ原稿を用意しておくことが望ましく、私自身もそれによって、学会報告で失敗せずに済んでいる。

今回の報告でもそうだが、報告には岡田ゼミ出身の先輩方が多く参加し、周囲を固めて下さった。何度学会報告を行っても、一人で行う報告はやはり寂しいものである。その点においては、報告の際に研究テーマが異なるにも関わらず、出席して下さい先輩方には感謝してもしきれないものがあつた。

学会参加の重要な目的のひとつが、大会初日終了後の懇親会に参加することなのだが、2011 年度の懇親会では、岡田ゼミ出身者が多数参加し、半ば同窓会状態であった。本来、そのような場所で飲むアルコールは、人を最高の気分にするものだが、会場までの移動に自家用車を使ったため、アルコールを摂取することが出来なかったことが残念でならなかった。

翌日は、「東日本大震災・原発事故からの地域経済社会の再建をめぐる」というテーマで共通論題報告が行われた。午前中 2 時間半かけて 4 名の報告者による報告、コメントがあり、午後には 2 時間 40 分かけて討論が行われた。東日本大震災は、日本の学術界においても共通の重要テーマとなっているが、政治経済学・経済史学会においても学会員の関心は高かったようで、例年の共通論題よりも参加者は多い様子だった。

このように 2011 年の大会は、例年とは異なるテーマ設定、雰囲気の下で、報告・討論が行われた。

日本地域経済学会：事務局員としての学会参加

学会事務局員として、学会の全国大会に参加することは、ある意味で研究報告を行うよりも、長時間神経を使

うことかもしれない。また大会までの準備期間についても、自らの研究報告に費やした準備期間よりも長いかもしれない。

日本地域経済学会の事務局では、例年全国大会を実施する際には、現地実行委員会と学会事務局が協力し、各種業務を担当することになっている。以前は、現地実行委員会がすべての業務を行っていたとのことだが、私が日本地域経済学会に参加し始めた時には、学会事務局と業務を分担するようになっていた。

大会実施にあたって学会事務局が行う主要業務は、自由論題報告者の募集告知、自由論題・共通論題報告要旨の回収、報告要旨集、大会プログラム、理事会・総会資料の作成、参加はがきの送付・回収、学会 HP の更新、学会費納入状況の再確認、大会当日における受付業務およびその他の庶務である。これらの業務に 6 月下旬頃から本格的に関与し、大会の開催を側面からサポートすることが、事務局の役割である。これらの業務は、広範囲におよび、同時並行的に発生・進行するため、一人で処理出来るものでもないため、数名が随時分担・協力しこなしていくことになる。さらに現地実行委員会との密な連絡が必要となるため、所用がある場合を除いて、パソコンの前に釘付け状態となってしまう。

今回の大会（第 23 回金沢大会）では、東日本大震災という未曾有の大災害が発生したことにより、準備期間が後ろにずれ込み、自由論題報告募集、共通論題シンポジウムの準備・調整についても大会直前まで続けられた。くわえて例年より大会日時が、1 ヶ月程度早かったこともあり、時間的余裕は前回大会よりも少なかった。

大会のプログラム概要が固まり、大会まであと一ヶ月となったところで、現地実行委員会と業務調整を行うため、大会当日各業務を担当する事務局員 4 名とともに下見を兼ねて、金沢大学サテライトプラザに赴くことになった。この打ち合せは、日程の関係上、日帰りによって行われ、予算の関係上、金沢まで私の自家用車を使用せざるを得なかった。

金沢において、現地実行委員会の佐無田光先生、神崎淳子さんと合流、昼食を取った後、金沢大学サテライトプラザにて打ち合せとなった。余談ではあるが、事務局メンバーは昼食をご馳走になり、金沢名物の食材を堪能することが出来た。打ち合せの際には、現地アルバイトとの役割分担を決め、スケジュールの段取り確認に加え、大会会場となる施設の確認を行い、報告者控室、理事会会場等をその場で決めることが出来た。事務局側としても、受付の設置場所の確認や事務局員控室の確認をすることが出来たことで、大会の全体像を想定し、人員配置を決めることが可能となった。

このように、金沢への出張は、大会に向け実り多いものであったが、日曜日であったこともあり、京都帰宅時には大渋滞に巻き込まれるという想定外の事態となった。

最終的には、全員が無事その日のうちに帰宅するが出来たのだが、この大渋滞の結果、高速道路を滋賀県内であきらめ、一般道での移動に切り替えたため、帰宅時間が深夜となったのみならず、私自身は風邪をこじらせてしまい、その後 2 週間、風邪による苦痛と学会報告準備等により、非常に苦しい思いをすることとなった。

大会 10 日前になると報告要旨集、理事会・総会資料の作成等ではいよいよ慌たしくなった。報告要旨集の作成は、印刷会社担当者との待ち合わせ時間 5 分前に完了し、理事会・総会資料についても現地出発前日夜の完成となったが、何とか大会までに事務局側に課せられたすべての準備を整えることが出来た。

いざ大会が始まってしまうと、その後は流れに合わせて、スタッフが順次対応していくしかないというのが実情であろう。大会期間中においては、一部混乱も見られたものの、現地実行委員・現地アルバイトの皆様、事務局員の協力もあり、大会を無事終わらせることが出来た。また大学の研究室から持参した私物のレーザープリンターも大いに役に立った。ただ私は、個人的な事情により、当初から大会の準備に関わっていながら、大会初日の業務を手伝うことが出来ず、現地スタッフをはじめ事務局員に多大なるご迷惑をおかけすることになってしまった。さらに、所用を済ませ金沢市内の懇親会場に急ぎ戻ったが、懇親会は終了した直後であり、止むを得ない仕様ではあったが、非常に残念なことであった。このため、私は日本地域経済学会の懇親会にまだ一度も参加していない。

ところで、大会が終了すると事務局員の仕事は終わるのであるのか。決してそのようなことは無い。大会終了後には、会計処理業務、共通論題シンポジウムのテープ起こし、学会誌の発送準備、HP の更新等の作業が発生し、さらに通常の事務局業務も継続して行う必要がある。これも、事務局員が分担して作業を進めることとなろう。

2つの大会を終えて

2 つの学会に報告者として、また事務局員として参加し、改めて自らの勉強不足と社会経験不足を思い知らされる結果となった。

報告、事務局業務いずれをとっても、無論、周囲の協力が無ければ成し遂げられないものであり、貴重な経験を積むことが出来た。2011 年は、この点をのみをとっても実りの多い 1 年であったといえよう。

これらの経験から後輩に何かを伝えるのだとすれば、学会の全国大会に参加することは、最新の研究成果を吸収するよい機会であるだけでなく、学术界で無名の大学院生が名前を売り込む絶好のチャンスだということである。あるいは日頃、大学院ゼミで「もっともらしい」ことを言っている先輩が苦戦する姿を見ることが出来るかもしれない。学生時代とは、立場が常に不安定であり、

金銭的にも余裕の無い時期でもあるが、将来、研究者を志す皆さんには、是非とも修士課程在籍中に、一度は全国大会に参加してもらいたいと考える。

また最後に、各所でご協力・ご支援を頂いた岡田知弘先生をはじめ、現地実行委員会の皆様、学会員の皆様、大学院生には、この場をお借りし、改めてお礼を申し上げたいと思う。

(京都大学大学院)

研究活動報告

地域経済研究会

2010 年 12 月 18 日(土)

- オギユスタン・ジャン・ルイ 氏 (筑波大学)、関根佳恵 氏 (京都大学大学院)
「日本の地理的表示制度の現状と課題—神戸牛と松阪牛を事例として—」
- 徳永 昌弘 氏 (関西大学)
「東方からみた新興市場ロシア：日系企業の対ロシア投資に関する予備的考察」

2011 年 2 月 5 日(土)

- 高橋 昌太郎 氏 (京都大学大学院)
「広域観光振興事業の展開と課題—歴史街道推進協議会の事例から—」
- 迫田 克信 氏 (京都大学大学院) 他
「うごく地域・うごかされる地域」

2011 年 4 月 23 日(土)

- 大貝 健二 氏 (北海学園大学)
「地域産業連携の新たな展開—北海道・十勝地域の小麦ネットワークを中心に—」
- 片野 直子 氏 (京都大学大学院)
「京北町の京都市編入合併の検証—住民意識調査と現地ヒアリングをもとにした平成の合併の実証研究—」

2011 年 6 月 25 日(土)

- 岡田 知弘 氏 (京都大学大学院)
「東日本大震災と復興をめぐる二つの道—『創造的復興』か、『人間の復興』か—」
- 小山 大介 氏 (京都大学大学院)
「グローバル化時代のコンテンツ・ツーリズム」

2011 年 12 月 3 日(土)

- (明治大学京都大学院生研究交流会)
- 竹下 諒 氏 (明治大学大学院)
「職種の代替可能性と賃金格差」

○片野 直子 氏 (京都大学大学院)

「自然公園制度と国土政策からみる農村地域開発の考察」

○中浦 航平 氏 (明治大学大学院)

「マクロ経済における CDS の累積ポジションに対する考察」

○山下 智佳 氏 (明治大学大学院)

「『信頼』概念に関する考察と医療機関のガバナンス—ソーシャル・キャピタルを中心に—」

○早川 佐知子 氏 (明治大学大学院)

「医療専門職への派遣労働自由化に関する一考察—アメリカの事例から—」

○小山 大介 氏 (京都大学大学院)

「世界経済の多極化とアメリカ産業構造の変化」

○郭 思宜 氏 (京都大学大学院)

「台湾における原子力政策の展開過程」

○三重 遷一 氏 (京都大学大学院)

「京都市南部の人口増加とまちづくりの展開」

○新藤 佳奈 氏 (明治大学大学院)

「ジョン・デューイの成長概念をめぐって」

○水島和哉氏 (京都大学大学院)

「京都市の都市形成と小売業」

2012 年 2 月 4 日(土)

○杉浦 喜代一 氏 (城陽市役所)

「高速道路とまちづくり—城陽市の新市街地開発計画の事例—」

○則藤 孝志 氏 (京都大学大学院)

「和歌山県田辺市における農商工連携の展開と地域づくり—『ダイダイプロジェクト』に着目して—」